



庶務幹事（広報担当）

吉川 伸哉

福井県立大学海洋生物資源学部

研究対象生物種：褐藻，パルマ藻

研究分野：植物生理学

好きな藻類：ハネモ

引き続き、広報担当として学会 HP の管理・運営を担当することになりました。学会からの情報発信が滞らないように頑張ります。



会計幹事

四ツ倉 典滋

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

研究対象生物種：コンブ類

研究分野：多様性，保全，育種

好きな藻類：北海道のコンブ（川汲尾札部のマコンブ，  
忍路のホソメコンブ，追直のエンドウコンブ，など）

前期はこれまでにない状況のなかで、手探りで業務に当たってきました。さまざま貴重な経験をすることができ、サポートをしていただいた多くの皆様に感謝申し上げます。今期も役員間のチームワークを大切に、健全な学会運営に努めてまいりますので、引き続きよろしくお願ひ致します。



## アオミドロ語誌（4）： アオミドロの語源は「あをみどり」

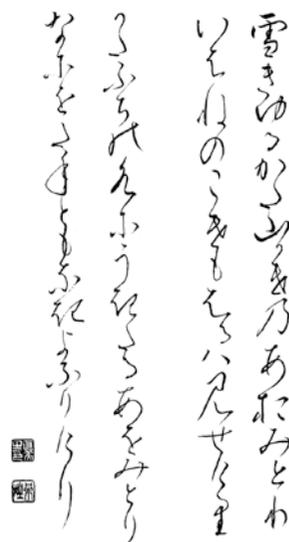
仲田 崇志

アオミドロの語は江戸時代に登場したが（前号『語誌（2）』参照），『本草綱目啓蒙』（小野蘭山，1803-1806 刊，17 巻 1 丁裏）には「一名アヲミドリ」とある。アオミドリはアオミドロの古い形で、鎌倉時代から用例がある。

藤原定家（1162-1241）の和歌に「あ於みと利」とあり（『拾遺愚草』1233 頃成立，自筆本上巻 39 丁裏；図右），これが一説にアオミドロとされた（『大言海』）。おそらく陸生藻や地衣を指したものだだろうが，色名とする解釈もある（久保田 2017. 藤原定家全歌集 上，p. 71）。

より確実な例は藤原光俊（1203-1276）の和歌（『新撰六帖題和歌』第 5 帖，1244 頃成立，穂久邇文庫本 77 丁裏；図左）で（『日本国語大辞典 2 版』），「ミツニウキタルアヲミトリ」とある。この歌は緑色を題材に詠まれたため，元々は色の名だったアオミドリが，淀みに浮く藻類や水草を指すようになったと推測される。後の『日葡辞書』（1603 刊）にも，「Auomidori」が川の藻や陸生の藻・苔などを指したことが記されている（土井ら 1980. 邦訳日葡辞書，p. 40）。

おそらく江戸時代より前，アオミドリは青緑色の藻類を広く指し，江戸時代中頃までにアオミドロに転訛した。そして陟厘に同定されたことによって（『語誌（3）』参照），意味が糸状藻に限定されたのかもしれない。



アオミドリが登場する和歌（仲田梅煌書）。右，藤原定家作。『拾遺愚草』自筆本上巻 39 丁裏に基づく。「雪きゆるか多山可遣乃あ於みと利／い者ねのこ遣も者る八見せ个里」（雪消ゆるの片山陰の青緑 岩根の苔も春は見せけり）。左，藤原光俊作。『新撰六帖題和歌』永青文庫幽齋奥書本を，他の写本を参考に改変。「可多ふち能水尔う起多るあをみとり／な丹を多年とも奈起よ奈り介り」（片淵の水に浮きたる青緑 何を種ともなき世なりけり）。幽齋奥書本では「水耳佐き多る」（水に咲きたる）となっている。